

## 対峙する曳山と若者たち—秋田県・角館

小西 賢吾



「交渉！交渉！」

黄色いタスキをかけた「交渉員」の一声から、かけひきの幕が開く。向かいあい、停止したヤマ（曳山）と群がる男たち。秋田県、角館のお祭りの醍醐味とも言われる交渉の一コマである。

美しい桜や武家屋敷の町並みで有名な角館には、毎年9月になると熱狂の空間が現出する。神明社と薬師堂という2つの寺社が合同した、3日間にわたる祭りが行われるのだ。氏子地域からは18台ものヤマが出て、寺社に参拝して町内を巡行する。ヤマには人形と華やかな装飾。優雅で、時に勇ましい飾山囃子（おやまばやし）の音色をバックに、美しい踊り子が舞い踊る。そして夜にはヤマ同士がぶつかり合うヤマブツケがある。が、この祭りを評してある角館衆は言う。「日本一不親切でわかりにくい祭り」であると。

確かに最初に見た観光客は面食らうだろう。ヤマはバラバラに巡行するためどこにいるのか見つけにくいし、なかなか動かないヤマもいる。半纏姿の若者にいつ動くのか聞

いても要領を得ない。ヤマブツケの迫力には圧倒されるが、なぜぶつけるのか、なぜこの組み合わせなのか。楽しい祭りのはずなのに男たちの顔つきは一樣にこわばっている・・・何なんだ、この祭りは？

じつは筆者自身も、最初に見た時はまったくわからなかった。そんな私をよそに若者たちは憑かれたように熱狂し、「オイサ、オイサ！」の掛け声を連呼。どうしようもない疎外感を味わった私は最後まで見ていられず、宿へと退散したことを告白する。

いったい何がヤマの動きを支配し、熱狂を作り出すのか。この問いをとく鍵のひとつがヤマのかけひきであり、それが顕在化するのが交渉の場面である。

ヤマ同士が路上で鉢合わせすると、通行の優先権をめぐって交渉が行われる。寺社参拝などの「目的」を持った方が先行するのが基本である。しかし交渉がまとまらなければ「道は自分で作る」となり実力行使、ヤマブツケに発展する。特に本番と呼ばれるヤマブツケでは、先頭部を持ち上げ斜めになったヤマ同士が、長時間にわたって絡み合い、押し合う。以前は夜明けまでブツケをするのが恒例であったという。

交渉では、お互いのヤマの状態を確認、目的の表明に続いて、どちらが先行するか、交差するならその方法は・・・など丁々発止のやり取りが行われる。その背後には状況を厳しい目で見つめる責任者たちがいる。交渉員はしばしば結果を「ヤマに持ち帰り」、責任者の指示を仰ぐ。すんなり交差か、じらすのか、ブツケも辞さないのか。状況は刻々と変化する。話の内容を聞き取ろうと群がる若者。ヤマの上でどっしり構える先導。意味ありげに立ち話をする年長者たち。



写真

彼らは、幼い頃から祭りの中で育ち、普段から顔を合わせている。交渉員たちは、交渉の相手や、背後の責任者が誰か、その性格や癖まで踏まえた上で交渉に臨むのだという。交渉は責任者のよりマクロな戦略とも密接にリンクする。彼らは前年の展開や、ときに数十年もさかのぼった経緯を踏まえ、曳き回しの計画を練っているのだ。ヤマは交渉を行いながら、自らの道を切り開き進んでいく。最後に待つのはヤマブツケか、それとも……？

この祭りの「わかりにくさ」は、こうした個々の場面や動きの中に織り込まれた関係の多さ、厚さに起因しているといえる。まだその全貌を知るには至っていないし、知る時が来るかもわからない。ただ、若者の一員として微力ながら祭りに関わり、人垣に体をねじ込んで初めて交渉の言葉を聞いた時から、私はこの祭りに踏み込み、自分なりに「わかる」道しるべを得たのかもしれない。

「いいお祭りをする」という言い回しがある。一見簡単にしてその意味は重く、深い。

若者はそのために奔走する。決して楽しいことばかりではない。何か名状しがたい力に突き動かされるように動き回り、気がつくとも祭りは終わっている。アトフキ（祭り後の納会）の席で誰ともなく「いいお祭りしたな・・・」との声が漏れる。その時の穏やかな表情は忘れない。しかしその直後、心は次の祭りへ向かう。課題は山積している。祭り全体の運営からヤマの曳き回し、一人ひとりの関わり方に至るまで。再び彼らはそれぞれの生活の中で「いいお祭り」に向けて歩みはじめる。

そして私はまた角館を訪れる。駅を出て町に向かい歩いていると、「お帰り」と声をかけられる。じわりと喜びを感じる瞬間である。空き地や駐車場にシートで覆われたヤマが見られるようになると、祭りは近い。私たちは「オイサ、オイサ！」の掛け声とともに、再びあの熱狂の中に飛び込んでいく。新たなストーリーが紡ぎだされる瞬間を共有するために。